

部活動としての創作ダンスの意義に関する一考察

A study of the meaning of creative dance as a school club activity

1K04B064-4

川瀬 亜紗子

指導教員

主査 杉山千鶴先生

副査 寒川恒夫先生

1. 研究目的及び方法

創作ダンスは、完成度や順位を競うという点で競技性も有するが、他の競技スポーツとは異なり、表現が必要不可欠である。そして部活動は、学校という教育機関の中にありながらも教育課程外に位置づけられている。勝利至上主義などの諸問題は今も後を絶たないが、それらを問題視する意見以上に、部活動を肯定的に見る意見は多い。

従って本研究では、創作ダンスという種目と部活動という組織の組み合わせについて検証するとともに、部活動としての創作ダンスの意義を明確化することを目的とする。

本研究は、関連文献・資料・インターネットを参考とし、自身の経験も織り交ぜながら考察した。

以下に本文に従い、得られた結果を記す。

2. 体育教育の一領域としてのダンス

2-1. ダンスが日本の教育に導入されたのは、明治初期である。戦時中は学校ダンス廃止論も持ち上がったがそれを乗り越え、戦後は民主的な活動としてスタート、現在は創作ダンスが主流となっている。

2-2. 体育ダンス普及の貢献者として、3名の人物に着目した。戸倉ハルはダンスを通じた女性らしさの形成を訴え、三浦ヒロはダンスによる感情表現と人間育成を主張した。松本千代栄は、戦後すぐに生徒の個性を尊重する民主的な考えを実践に移し、創作ダンスの普及の柱となった。

2-3. 体育ダンスの教育的意義は、日常生活においても期待できるものである。その中でも創作ダンスは、まさに体育教材にふさわしいと言える特性を持つ。

2-4. ダンスの本質は、主客の境界を溶解する力であるエクスタシスにある。現在の体育ダンスにおいては、創作過程を経て得られる集団的達成の経験によって、生徒の中にエクスタシスが生まれると言える。

2-5. 体育ダンスと創作ダンスの特性はそれぞれの特性を持つが、この特性こそが日本の教育においても重要な価値を持っている。

3. 運動部活動とは

3-1. 現在の部活動の期限となったのは、明治時代に結成された「校友会」である。戦時中は「報国対」と改組され、競技力の向上よりも戦力増強のための

訓練が全面的に施された。

3-2. 戦後の部活動は、民主化政策の下で教育課程に取り込まれてスタートした。その後 1972(昭和47)年に、必修のクラブ活動の誕生とともに教育課程外にはずされ、現在の部活動となった。現在必修クラブは廃止され、課外活動の一環として部活動が行われている。

3-3. 創作ダンスはその特性から、仲間とともにいる時間が長く、これにより部活動の目指す集団的達成の経験を獲得することができるため、部活動にふさわしいと言える。また学外への発表という形式により、地域とのふれあいも図ることができる。

4. コンクールという場

4-1. 戦後の民主化政策によって創作ダンスが盛んになり、終戦後間もない 1948(昭和23)年から早速ダンス・コンクールが開催されているが、これは民主的活動をいち早く取り込んだものと見ることができ、非常に画期的だったと評価できる。

4-2. 創作ダンスはシンクロナイズド・スイミング及びフィギュアスケートと類似点を持つが、その審査基準の違いは、どのような目的をもって始められたかという、それぞれの種目の起源にあった。

4-3. 創作ダンスの作品提示の場としては、発表形式とコンクール形式とがある。前者は作品に優劣をつけず、後者は作品を多面的に評価できる。このような二面性は、創作ダンスの長所と言える。

4-4. 主なダンス・コンクールのひとつ、全日本高校・大学ダンス・フェスティバル(神戸)における各要素別の採点方式に見られる、コンクールの特性について指摘した。

5. 結論

同じ場所・時間を共有する点、期待される効果を網羅する点、部活動にまつわる諸問題に対応可能な点、また外部からの目標設定を受けて向上心を維持できる点において、創作ダンスは部活動に非常にふさわしい。

そしてダンス部という部活動は、作品提示の場に発表形式とコンクール形式の2つがあること、仲間とともににより多くの時間を共有していることの2点において、集団的達成の経験、つまりエクスタシスの経験が可能であることにあるという存在意義を有していると言える。